終章 「歪み」と通常性 あとのき

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>西嶋 義憲</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>カフカと通常性 作品内対話における日常的言語相互行為の「歪み」</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>193-198</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2005-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2297/16844">http://hdl.handle.net/2297/16844</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
終章 「歪み」と通通常性

本書をまとめるにあたって、まず要旨を述べることから始める。
本書の基本テーマは、コミュニケーション行動における通通常性である。コミュニケーション行動の通通常性は、コミュニケーション参与者どうしがお互いに想定している「当たり前」の言語行動および非言語行動によって確保されるもので、普段は意識することがめったにない。通通常性が意識にのぼるのは、それが危険にさらされるような、まさに「通常」でないコミュニケーション行動が見られたときである。たとえば、話者が期待した反応を対話相手がしないときなどがそうである。本書では、そのような通通常性が問題になる例を、カフカ作品の「歪み」のある対話（第一部）、翻訳（第二部）、引用行為と慣用句（第三部）に分けて考察してきた。

第1章は、第一部全体の基調をなす。そこでは、カフカのDie Bäume（『木々』）という小品を取り上げ、その作品がもつ構造上の「歪み」を明らかにした。その「歪み」とは次のようなものである。テクストを構成する2つの主要レベルに関して言えば、テクスト内言語相互行為レベルでは、構成性のきわめて高い言語行為連鎖が認められる。ところが、意味論レベルでは、整合的な事務が叙述されないので、構成性はきわめて低い。そのため、読者が統一的な意味世界を構築することはむずかしい。すなわち、言語相互行為という対話の形式面に関してはその成立条件が充たされているが、意味世界的構築面に関してはその整合的な意味世界的の成立を妨げるという不均衡な構造が見られる。両レベル間に見られる、このような構成性の度合いのアンバランスがテクスト構造上の「歪み」を構成し、それがテクスト全体の「奇妙さ」を作り出していることが明らかにされた。この「歪み」は、第一部で扱った6つのテクストに共通する基本的特徴となっている。

この「歪み」の基礎、すなわち、意味論レベルでの不整合な意味世界を提示するあるいは意味世界そのものの構築を拒否する構造は、慣習化された相互行為の形式の中に当たり前のように埋め込まれているので、気づきにくい。

- 193 -
まさに，その形式を「隠れ蓑」として巧みに利用し，そこにある種の技法を施すことにより，「歪み」が形成される。本書が扱ったテクストから抽出された基本的な技法は，(1)同一言語行為の繰り返しによるズラシ，(2)「お見通し」発言，(3)非現実話法の理由節の拡張と否定的願望の提示，の3種である。これらの技法について，それらが析出された作品と関連させながら確認してみよう。

(1)は，同一言語行為の繰り返しによって，日常的な言語相互行為が形式的に成立するように見せかけておいて，その実，ある種のズラシが行なわれているという技法である。第1章の『木々』では，否定行為の繰り返しによって「主観世界」から「客観世界」へ，そして新たな別の世界との関連づけが暗示される。第2章の Von den Gleichnissen （『寓話について』）では質問行為の繰り返しによって言明内容とメタ表現の間で焦点の移動が引き起こされている。第3章の Kinder auf der Landstraße （『国道の子供たち』）でも，質問行為の繰り返しの中で，知らぬうちに『Leute』から『Narren』へとテクスト表層上のテーマが変化させられている。移動や変化というズラシは異なる次元間にも起きる。第4章の Der Brunnen （『泉』）では，登場人物がまったく予期していない「声」の介入によって，対話が開始させられてしまう。その「声」は，さらに地の文の語りの次元にまで進出するのである。予期せぬ発話との関連では，(2)の「お見通し」発言が問題になる。その技法は，第5章の Die Flöte （『笛』）において見られた。「お見通し」発言は，二人称の対話相手の思考内容を断定的に断定するもので，通常の言語相互行為ではありえない行為である。これも異なる次元間の関係づけが暗示されるものであるが，対話展開の原理としても機能する。第6章の Auf der Galerie （『天井戯画に』）に認められた。そこでは，日常的な非現実話法の構文において否定的な願望が提示されるだけである。さらに，その願望世界が否定される際に，本来なら不要な理由が付加されるというものである。焦点とならない箇所の不要な展開は第1章の『木々』においても見られた。

いずれの技法も，習慣化され，自動化した日常的言語相互行為の形式的枠組とそれによって維持される通常性を前提としている。その通常性は，質問
行為と対答行為、あるいは否定行為と反論行為といった論弁的特徴をもった相互行為によって確保される。すなわち、ドイツ語で書かれたテキストの対話では、論弁性がその基礎となっていることがわかる。そのような相互行為を基本としながら、そこにわずかなズラシを加えることにより、テキスト構造を歪ませ、奇妙な世界を構築させている。このように、カフカ作品は、自動化され習慣化された言語使用あるいは思考法がどのようなものなのかを明らかにするために利用できることができた。

第二部では、カフカ作品とその翻訳を比較することにより、ドイツ語表現と日本語表現の背後にある通常性の違いを浮き彫りにしようと試みた。第7章では、Die Verwandlung とその翻訳の『変身』を利用して、»Demut“と「へりくだり」という2つの言語行動が比較された。「へりくだり」は日本語社会において頻繁に観察される日常的な言語行為だが、そのドイツ語原語表現である »Demo" をそのような行動として訳出すことは可能なのか、という疑問を出発点に、両言語行動の違いを明らかにした。第8章では、前章と同じ作品を用いて、»bereuen“と「恥ずかしく思う」とを比較した。過去に行なった行為を後になってしまわなければよかったと悔やむ際に、ドイツ語では »bereuen“を用いて表現している箇所が、日本語では「恥ずかしく思う」と訳されていた。その語義と用法を比較することにより、言語行動を評価する際、ドイツ語と日本語では着眼点に違いがあることを示した。

一般に、個々の社会のコミュニケーションではその社会固有のコミュニケーション上の通常性が認められる。そのため、日本語としては自然なものとし、理解可能な言語行動が、ドイツ語社会では異常だと思われることがある。逆にドイツ語社会では当たり前と判断される行動が、日本人にとっては奇妙に感じられることもある。翻訳する際は、その違いを考慮しないと、ドイツ語社会のある種の言語行動が、日本語社会というコンテクストの枠組みに引き付かれて理解されてしまうことになりかねないし、また、その逆も、当然の事ながら起こりうる。そのような誤解の可能性をさぐるためには、翻訳をオリジナルテキストと比較するという方法も有効であることがわかった。これは、今後も利用可能な方法であろう。もちろん、その際、複数の翻訳を考慮する必要がある。一つの翻訳例だけに限って比較すると、訳者固有の
解釈が排除できないからである。

第三章では、カフカ作品から離れて、日本語とドイツ語それぞれの言語文化の脳後にあるコミュニケーション上の通常性の違いを、引用動詞と常用句を利用して明らかにしようと試みた。第9章では、日本語とドイツ語で書かれた小説とそれぞれの翻訳を用いて直接話法における伝達動詞の使用率とその種類について日独比較を行なった。ドイツ語では、コンテクスト情報が具体的でより細分化された意味を有する伝達動詞を用いてメタコミュニケーション的に言語化する傾向があるが、他方、日本語では、そのような情報は、引用される発言自体に盛り込まれているため、コンテクストを明確化するための伝達動詞は頻繁には用いられないことがわかった。続いて第10章では、対応する類似場面で使用される日本語とドイツ語の常用句について、その形態と意味を比較対照した。その結果、両言語では、常用句使用の背景にある視点の位置に違いがあることがわかった。常用句は、それが使われる社会の文化的社会的背景のもとで形成されてきたものだ。それに対比することにより、それぞれの言語社会で「当たり前」と見なされること、すなわち通常性を明らかにできることが示された。

常用句どうしの日独比較については、これまであまり関心が向けられず、十分な研究がなされてきたとは言えない。両言語の対応する常用句の比較は、コミュニケーション行動の通常性を明らかにする上で必要かつ有効な手続きである。常用句の体系的な比較は、それを関連するコミュニケーション行動評価概念の比較とともに、今後の課題である。
あとがき

私の研究対象は言語である。言語研究の出発点となったのは、語場理論に基づく語彙意味論研究であったが、その後、発話行為理論、テクスト言語学、言語相互行為研究といったように、静態的な言語学的意味研究から日常的コミュニケーションにおける発話の動態的機能研究へと関心の重点を少しずつ広げてきた。最近ではとくに、ポライトネス関連概念の日独比較に主な関心がある。ところが、カフェカ作品の語義学的分析は、上記の対象領域の拡張に深く関わっている。すなわち、カフェカ作品の分析が契機となって、テクスト言語学から言語相互行為研究へと関心領域が広がったのである。その経緯にふれ、謝辞としたい。

カフェカ関係で最初に拙論を公表したのが1989年なので、それより1年か2年前だと思うが、カフェカ作品の紹介書でDie Bäume（木々）には、円環構造、木の幹についての二様の読み、スライドするパラドックスなど、さまざまな解釈が提出されていることを知った。当時、テクスト言語学の分野で研究を行っていた私は、たった4文からなる短いテクストであるにもかかわらず、多様な解釈や読みを許すことに驚かされ、このテクストに興味をもった。直ちに、Die Bäumeに関してこれまで提出されてきたさまざまな説を調べはじめた。すると、序文でもふれたが、言語学を専攻している者の視点から見ると、この作品の文学的解釈はきわめて主観的であいまいな分析に映った。そのため、後者どうしが互いに参照可能な共通の言語学的構造記述がないこともわかった。そこで、文学研究で提出されてきた解釈を客観的な参照枠で検証できるよう、テクストの言語構造をテクスト言語学の手法を用いて構造分析を行なった。その結果、この作品はテクスト構造上きわめて特異な形式を有していることがわかった。すなわち、日常的言語相互行為として形式上正常な発話の展開が観られるが、意味論上整合的な世界が構築しにくいのである。この分析以降、他のカフェカ作品の分析を対話分析を行うことによって、一見正常を示すか如実のところ「歪み」のある言語相互行為に関わることとなった。ところが、その「歪み」を発見するためには、その背後にある通常の言語相互行為を知ることが必要である。このようにして、日常的な言語相互行為の研究へと関心の中心が向けられていったわけである。
ところで、テクストを言語学的に分析し、その構造記述を公表することは、言語学ができる文学分野への貢献だという一念のもと、その成果を論文としてまとめるや、掲論を面識がまったたくない数多くのカフカ研究者に対してまでも直接送りつけた。今から考えると赤面のいたりであるが、こういった非礼にもかかわらず、親切にも丁寧なご返事をくださった先生も少なくなかった。そのような肯定的な反応があったからこそ、それが励みとなって、それ以外の作品についてもさらに続けて分析を試みる気になった。ここで一人一人のお名前を挙げることはしないが、この場を借りて、当時の失礼をお詫びするとともに、ご批判やご意見をお聞かせくださったことに対して、お礼申し上げるしきいである。

また、このような非礼行為による、思いもかけない別の「成果」として、西日本を中心にしたカフカ研究会から、入会のお誘いを受けた。メンバーに加えていただいたおかげで、これまでほとんど中断することなくカフカ作品の分析に関わり続けてことができた。本書に収められた私のカフカ関連論考のほとんどは、この研究会で発表し、ご批判をいただいたものである。この研究会への定期的参加が、結果として本書の刊行につながったことになる。熱心にお誘いいただきたかった有村隆広先生をはじめとして会員の皆様に、改めてお礼申し上げたい。

さらに、カフカ作品の言語学的分析にあたり、テクスト言語学的分析は脇阪豊先生、川崎淳夫先生ならびに植田康成先生から、日常的言語相互行為分析は丸井一郎先生と Rudolf Reinelt 先生から、とりわけ貴重なご教示をいただいた。記して感謝したい。また、そのような分析に基づく言語学的解釈を文芸学の観点から批判的に検討してくださったのは、古川千家先生と古川昌文氏である。お二人にもお礼申し上げなければならない。

最後になったが、今年度からの法人化によって学部予算が逼迫しているにもかかわらず、経済学とは直接関係しない内容の本書を金沢大学経済学部研究叢書の一冊として刊行する機会を与えてくださった金沢大学経済学部の諸先生に対して、心より感謝いたします。

2005年3月
西嶋 義憲

-198-